

皆爲世所賞、若夫物茂卿之金叵羅集徂、平玄中之紅玉杯集華、特文人華靡之語、非其實也、源君美不

好酒而好酒器白石集、梁田邦美不解飲、而小盞淺酌、善與酒徒遊處蛭岩集、可謂奇矣、

〔一話一言三十八〕後水鳥記

文化十二のとし乙亥霜月廿一日、江戸の北郊千住のほとり、中六といへるもの、隱家にて、酒合戦の事あり、略中、白木の臺に大杯をのせて出す、そのさかづきは、

江島盃 五合入 鎌倉盃 七合入

宮島盃 一升入 萬壽無疆盃 一升入 合入

緑毛龜盃 二升入 合入 丹頂鶴盃 三升入

をのく、その杯蒔繪なるべし略中

〔安齋叢書一〕小原盃ハ、小原權兵衛トイフ者、元祿ノ比作出ス、

〔類聚名物考 調度十四〕小原酒盃 をはらさかづき

京都將軍の時出來し物となり、二寸四分の平盃なり、黒木の蒔繪有る故にさいふといへり、享保中にも幸阿彌何某に、仰付られて奉りし様有りといふ、北村季吟がいへるは、むかし小原の黒木賣の女ども、うたへる歌に、黒木めせくさ、をめせうすくもこくもきこしめせく、といへるによりて、この酒盃もおこれりといへり、さ、をめせは酒飲なり、或人云、東福門院様の御好にて、小原椀の形を以て御盃を仰せ付らる、黒木の蒔繪を、幸阿彌某まゐらせしとかや、寛永年中の事とぞ、その時誰人にや御側にてよみし歌とて、黒木めせめせくくろきさ、をめせこくも薄くもきこしめせく、

〔嬉遊笑覽十食〕をばら、屠龍工隨筆小原女どもの、笠かぶりて、歩みつれたるを、義政の東山より見給ひて、小原盃は作り初られしといへり、此説非なり、大原女を小原女とはいか、笠かぶりては